

驚き・感動・心温まる 「庶民の文化遺産」を次の世代へ

室井康平



[上から]
展覧会ポスター
占領下の日本製のおもちゃ
正座しているピリケン
2022.4.16 北原照久さん来館

(※1) 北原氏のコレクションについては、北原氏自らが運営する展示施設、展示スペースで常設展示されている他、1200坪の倉庫が満杯になるほどの膨大な数のコレクションが収集されています。

(参考)

・高山英男監修、財団法人日本玩具文化財団編『20世紀おもちゃ博物館』同文書院、2000年
・財団法人日本玩具文化財団ホームページ <http://toyoculture.org/>
(2022年6月18日アクセス)

2022（令和4）年4月16日（土）から6月19日（日）にかけて、当館では、世界的に著名なコレクターである北原照久氏のコレクションを展示した「北原照久コレクション展 -おもちゃ！ 広告！ 驚き、感動と心温まる物語-」を開催しました。ブリキのおもちゃのコレクターとして、お茶の間に知られている北原氏ですが、実は、コレクションはおもちゃだけにとどまりません。広告物、時計、クリスマスグッズ、ミニチュアアート、現代アートなど、様々な種類のコレクターでもあります。今回の展示では、その中から「おもちゃ」と「広告」にテーマを絞って展示を行いました（※1）。

「おもちゃ」は、明治末期のブリキのおもちゃにはじまり、戦前・戦後のおもちゃ、鉄人28号、鉄腕アトム、ウルトラマンシリーズ、リカちゃん人形などのキャラクターおもちゃ、船、車、飛行機などが、所狭しと並びました。子どもの頃の気持ちに帰る様な、夢のような空間になりました。

コレクションの多くは状態が非常に良く、現在でも当時と変わらない動きをするおもちゃも数多くありました。今回展示室では動かせなかったものの、北原氏のYouTubeチャンネルに、おもちゃが動いている映像が公開されているので、是非ご覧ください。

「広告」は、福助、招き猫、ピリケンといった縁起物、明治～昭和にかけてのポスター、店先に置かれていた店頭ディスプレイ、お菓子や薬が入っていたパッケージなど、時代を彩った数々の展示を行いました。足の裏を出していない「正座」するピリケン、「洋装」を纏った福助など、珍しいコレクションも展示しました。

4月16日（土）の展覧会開幕日に北原氏も来館。午前、午後の2回にわたって自らのコレクションを説明するギャラリートークを実施。コレクションの収集までのエピソードを紹介しました。今回の展示を紹介する動画を自身のYouTubeチャンネルにも公開。10回に分けて公開されています。

今回の展示の中から1点、歴史的背景も紹介したいと思います。展示の中に「MADE IN OCCUPIED JAPAN」と記されたおもちゃがありました。訳すと「占領下の日本製」になりますが、1945年から1951年の間に生産された輸出向けのおもちゃです。日本のおもちゃは、1910年代の第一次世界大戦頃から輸出額が急増。大戦勃発時には約200万円だったのが、1920年に2,000万円、1937年に4,200万円にも到達します。世界のおもちゃを席巻していたドイツ製のおもちゃが大戦の影響により失速、日本製のおもちゃが世界中に広まっていきました。その後、第二次世界大戦の影響で、鉄などの資材でのおもちゃ製造が禁止になるも、戦後に復活。戦後の資材不足の際には、アメリカ軍が廃棄した空き缶などの廃材を利用して、戦前から培われたおもちゃ技術を駆使し、おもちゃが戦後の輸出産業を支える事になりました。この他、セルロイド製のおもちゃ、ゼンマイじかけのおもちゃ等も輸出されました。このような日本の技術力やアイデアが、戦後の急速な復興、そして高度経済成長へ繋がっていったのです。経済成長の中で、電動やキャラクターといった、様々なおもちゃが生み出され、子どもたちの暮らしを彩りました。

北原氏は足掛け50年を超える収集を通じ、庶民の生活を映し出す古き良き時代のこれらのコレクションが、次世代へと継承されていくことを切望されています。実際、コレクションに囲まれると「この時代にこんなものが作られたのか!」、「このコレクションにはこんなメッセージがあるのか」といった驚き、発見がありました。大切に使われてきたコレクションたちが、展示で沢山のひとと出会う（“再会”）と、北原氏は「コレクションたちが喜んでいる」と表現されています。人々が営んできた歴史そのものを北原氏のコレクションで体感する事ができました。

(むろい・こうへい 当館学芸員)